

# 地域コミュニティの 防災力

重川 希志依

連載 第8回

## 災害エスノグラフィーによる“知”の共有



重川 希志依

### 1 災害エスノグラフィー研究との 出会い

「災害エスノグラフィー」、あまり耳慣れない言葉だと思います。「エスノグラフィー」とは、民族誌と訳されます。文化人類学の世界で用いられる研究手法の一つで、特定の民族や集団の文化や社会を具体的かつ網羅的に記録したものです。自分たちの知り得なかった異文化を体系的に記録することを目的としています。私は何

人かの研究者と共に、阪神・淡路大震災以降、この研究手法を用いて様々な災害の記録をとり続けてきました。その記録を災害エスノグラフィーと呼んでいます。

災害は、日頃体験することのできない未知の異文化といえます。しかも災害は毎回違ったかたちで起きます。その現場に居合わせた人は、初めて体験する、思ってもみなかったような異文化に直面し、その度に現場で苦悩し、工夫し、新たな知恵を生み出しながら何とか災害を乗り越える努力を繰り返してきました。

災害エスノグラフィーは、災害現場に居合わせた人たち自身の言葉を聞き、その人たちにとってその災害がどう映ったのかということ明らかにし、災害現場に居合わせなかった人々が、災害とはどういう文化なのか、被災地では何が起きるのか、それを追体験、共有化できるようなかたちに個々の体験を翻訳していくことを目

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

的としています。

## 2 災害時の消防団活動の エスノグラフィー

私たちの研究グループでは以前、消防防災科学技術研究推進制度による研究助成を受け、(財)日本消防協会と協力をして災害時における消防団活動のエスノグラフィー調査を行いました。阪神・淡路大震災、平成16年新潟豪雨災害、平成16年豊岡水害、新潟県中越地震、JR福知山線列車脱線事故、平成18年7月鹿児島県北部豪雨災害、平成18年北海道佐呂間町竜巻災害、平成19年能登半島地震、岩手宮城内陸地震で活動した消防団幹部の方々を対象とした調査結果から、いくつかの“災害現場の声”をご紹介します。

### —団員自らも被災者—

- ・自分の母親を救助できず目の前で焼死させてしまった団員は、家族を救えなかったこととその後消防団活動に従事できなかった両面で、非常に強い自責の念を持ち続けている。(阪神・淡路大震災)
- ・自らの家が床上浸水で、その後消防団活動に従事できなかった団員は非常に強い自責の念を持ち続けている。(鹿児島県北部豪雨災害)
- ・息子がいてくれればテレビ1台助かったのという団員の母親の声を聞くと、招集をかけた方に見れば非常につらい。
- ・団員の7割が被災した。しかし団員に頼んで召集をかけているわけだから、自分の家に帰れるわけがない。(新潟豪雨)
- ・自宅の後片付けは友人らが手伝ってくれたので本当に助かった。(新潟豪雨、鹿児島県北

部豪雨災害)

### —多様な消防団活動—

- ・ありとあらゆる活動をした。へそまで水に浸かりながらローラー作戦で取り残し者のチェック、弁当配り、上越インターで緊急消防援助隊の出迎えなど。半端じゃない数の応援隊が入ってくるので、受入れ、誘導などが必要だった。(新潟豪雨)
- ・真っ暗な中で家に取り残された人の救助活動にまわった。こちらがライトを回すと向こうもライトを回す。それで要救助者の確認をした。(新潟豪雨)
- ・交通規制のために国道の封鎖活動を行ったが、ドライバーとのトラブルが相当あった。(新潟豪雨)
- ・県警が入ってくると顔を知らないのでフリーパスではなくなった。それまでは皆知っている人ばかりなので活動しやすかった。(新潟豪雨)
- ・普段は火消しばかりやっているの、救助活動ではとっさの場合の判断がつきにくかった。(JR福知山線列車脱線事故)
- ・消防団は現場に入れない？入りにくい状況だった。また私らが救助できるような状況でもなかった。(JR福知山線列車脱線事故)
- ・死んだ人を運ぶのは初めてだった。でも一人運んだら、あとは何人運んでも同じだった。(JR福知山線列車脱線事故)
- ・消防は全て現場に出払って消防署は空っぽ。いつ火災が起こるか分からないので団が各所に詰めてくれということで、器具庫で待機し

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

ていた。(JR福知山線列車脱線事故)

- ・地震当日の昼は、各家庭のガスボンベの元栓確認を行った。(能登半島地震)
- ・地震当日の夜中は2回ほど、町内の巡回を行い、その日の夜はポンプ車で寝た。(能登半島地震)
- ・翌日中に、危険個所に黄色いテープをはり市民の安全を守った。(能登半島地震)
- ・屋根のブルーシートかけを3～4日間行った。自衛隊も断る危険な作業だった。1軒にかけると、次から次へと依頼がきた。(能登半島地震)
- ・緊急消防援助隊が100隊入って来たのでそれへの対応に振り回された。(能登半島地震)

## —使命感と団員の安全確保—

- ・どンドン川の水かさが増えてきたが、上流のダムが放流されたためだということは知らなかった。(新潟豪雨災害)
- ・最初は土のうを3段積み、水が越えたのでそれを2列にし、さらに土のうがひっくり返りそうになったので団員が手で土のうを押さえたが、こらえ切れなくなった。警官の避難しろという言葉でようやく撤収した。(新潟豪雨災害)
- ・決壊寸前には、川の水が蒲鉾のように盛り上がって対岸が見えないほどだった。(鹿児島県北部豪雨水害)
- ・決壊場所から流れ出る洪水の勢いは、川の流れと同じ速さで非常に急流であり、ボートも流されてしまうほどだった。(新潟豪雨災害)
- ・どこまで危険なところに団員を突っ込ませる

か。突っ込むというより、黙っていても自分から行くんですね。(豊岡水害)

- ・団員の単独行動が一番怖かった。皆と合流できる地点まで戻れという指示を出した。(新潟豪雨災害)
- ・農薬などが水に混じっているの、後になって身体のあちこちが赤くただれたり、かゆみが出たりした。(新潟豪雨災害)
- ・寒さでかなり消耗が激しかったですよね。ウエットスーツでもあればね。自衛隊の人らは、「あんたら、ようこんなボロ船に救命ジャケットもつけないと乗っとるな」と言って。(豊岡水害)
- ・団員の食べ物が無い、疲労度が増す、イライラする。本部からパン1個とジュースが1回だけ配られた。本部の人はライフジャケットつけているのに団員にはそれもない。(新潟豪雨災害)
- ・団員の使命感達成と安全のための行動の掌握、このことは非常に難しいし非常に悩んでおります。(豊岡水害)
- ・安全は本来組織の規律だと思うんです。命令系統をきちっとして、団の規律を守るための訓練を徹底して身を守ることを第一に考えるべきです。(豊岡水害)

いずれの災害も私たちの記憶に残る、大規模な災害でした。しかしマスコミによる災害報道で伝えられるのは、ごく一部の情報に過ぎません。ここにご紹介した消防団活動の実情は全く知られていないのが実情です。災害に立ち向かう様々な活動と、活動の裏にある多くの苦労や

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

努力を、一人でも多くの方に知っていただくために、これからも災害エスノグラフィー調査を通して、情報発信を続けていきたいと考えています。

防災をやる人間が“エスノグラフィー”という研究方法と出会うきっかけとなったのは、10年前に発生した阪神・淡路大震災でした。この災害は、これまで私たちが続けてきた様々な防災研究のあり方を根底から覆し、防災研究のあり方に大きな転換を迫る出来事でした。大規模災害に直面したことのない私たちが、頭の中で想像していたこととはまったく異なる事象が次々に起こったのです。このとき私たちは、自分たちが持っていた防災のパラダイムを完全に変えなければならないことを悟りました。そのときに出会ったのがエスノグラフィーです。

私たちの目の前で展開されていく阪神・淡路大震災の様々な事象は、これまでに知りえなかった新たな事実が多く、初めて目にする“異文化”でした。災害という異文化を理解するために、民俗学で用いられているエスノグラフィーを応用する必要性を強く感じたのがきっかけとなったのです。

## 3 暗黙知の重要性

私たちが知りえる災害情報の多くは、テレビや新聞などのマスコミ報道によるものです。ところがステレオタイプに陥りがちな災害報道で伝えられる情報には限界があります。たとえば、災害がおこるたびにマスコミが報じるのは、“気の毒な被災者”、“行政の対応に不備”など決ま

りきった内容が多いことにお気づきでしょうか。一方、専門家と言われる人たちが接する災害情報の多くは、専門的な報告書や論文から得られています。これらの情報は数字に基づいた分析が基本となっている場合が多く、たとえば建物の被害率は〇〇%、復旧に要した期間は〇日間というデータが重要視されます。これらの情報は形式知とよばれるもので、言語化された明示的な知識、客観的知識、論理的情報などの言葉で表現されます。しかしいずれの情報もある意味で断片的な情報であり、東海地震による死者がといわれても、その情報だけで自分自身の身の回りにいったい何がおこるのか、地震から1週間目にはどうなるのか、1年後にはどうなっていくかを想像することは難しいのです。

これに対し災害エスノグラフィー調査は災害現場に居合わせた人たちの言葉を聞き、個人の体験をもとに将来に向かって残すべき教訓や他の災害にも普遍化できる事実や知恵を明らかにすることを目的としています。思いもよらぬ災害に直面したとき、体験者は初めて出くわした問題の何に悩み、苦勞し、どのように解決していったのかという一連の思いや行動の移り変わりを明らかにすることが災害エスノグラフィー調査の目的です。先に述べた形式知に対し“暗黙知”と呼ばれるもので、言語にしがたい知識、勘どころなどの言葉で表現されます。形式知に比べるとなんとも泥臭い印象を受けますが、問題を解決するための“役に立つ知恵”であることは間違いありません。これまでの防災研究では切り捨てられてきたこれらの暗黙知を一つ一つ拾い集め、災害を体験したことのない人たち

と広く共有化することを目指しているのです。

## 4 災害に備え賢くなるために

残念ながらマスコミによる災害報道から私たちが得る知識には限界があります。たとえば「避難所とは気の毒な被災者が肩を寄せ合って暮らす場所」と思われがちですが『避難所とは恐怖と不安に駆られた尋常でない人が1,000人以上集まる場所』でもあります。「災害時の医療機関は負傷者が殺到し大混乱の病院」という印象があるかもしれませんが実際には『病院に来たのは死者か軽傷者ばかり。病院内では誰も文句

をいわない静寂さ。地震が起きた日の夕方以降はびたりと患者が来なくなった』のが現実です。「暖かな善意のこもる救援物資が被災地で感謝される」と報道される反面、『最初の2日間は市役所の全職員は物資の積み下ろしに忙殺される。余った救援物資のために貸し倉庫代が1200万円』という事実がおこっています。このような現実を事前に知っておくことができれば、いざ自分が被災者となった時に、あるいは被災地で救援活動を行おうと思った時に、過去の過ちを繰り返さず、少しでも賢く災害を乗り越えることができるのではないのでしょうか。